

肩肘張って環境問題を訴えるのではなく、今の10〜20代の若者たちは、軽やかに、楽しみながらエコに取り組んでいます。そんな今どきのエコな「若者たち」の活動をレポートします。

エコジン・レポート

若者たち。



文／本吉恭子 写真／キッチンミノル

草花クラブが世界を救う!?

京都府立桂高校 草花クラブ

イネの種をまき、芽が出て、苗となるまでには大量の水が必要だという。たとえば、わずか育苗箱6枚ほどの稲の苗を育てるために必要な水は、約100ℓ！イネの種は水分をたっぷり含まなければ発芽しづらいため、稲作農家では種まきの10日前から種を水に浸し、発芽するまで毎日、新しい水と入れ替え続ける。

ところが、そんなイネの苗を育てるための水を、93%も削減する「超節水」の栽培方法が誕生した。その栽培方法とは、密封した「箱」の中で苗を育てるというもの。「えっ、それだけ!？」と拍子抜けするほどシンプルな方法ながら、育苗箱6枚あたりに必要な水は、最初に与える7ℓのみ。あらかじめ種を水に浸ける必要もないため、通常は45日かかる苗作りが、わずか30日で完成する。

そんな「箱」は「Katsura Nursery Case (カツラナーセ

リー・ケース)」を製作・発表したのは、京都府立桂高校の「草花クラブ」に所属する高校生たちだ。2006年にはこの高校生たちの研究「小さなCase」の大きな可能性——究極の水循環で90億人の食を守る——が、世界的に注目される「ストックホルム青少年水大賞準グランプリ」を受賞した。

「このケースの原型は、19世紀にイギリスで考案され、船での植物輸送を生業とするプラントハンターたち



右頁／草花クラブの部員たち。緑化実験が進行中の高校屋上にて。
上／高校生たちが製作した、「超節水型」栽培を実現する「Katsura Nursery Case」。
右下／苗の手入れをする部員たち。
左下／caseの内部。

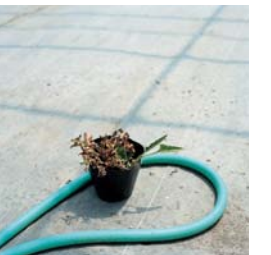




右上／苗の手入れ。
左／caseに使う木枠を運ぶ部員たち。
下／caseの天板に張る90%遮光の遮熱フィルム。



右上／現在は、caseを使ってノシバの苗栽培も進行中。
左上／クラブの日課、草花への水やりは欠かせません。
左下／ノシバの種まき作業。



京都府立桂高校 草花クラブ
〒615-8102
京都府京都市西京区川島松ノ木本町27
電話 075-39112151
e-mail: katsuha-ns@kyoto-be.ne.jp
HP: http://www1.kyoto-be.ne.jp/katsuha-ns

ースを観察していると、本当にそう感じます。地上の植物から蒸散する水分が熱を吸収し、暑さをやわらげてくれるのと同じことが、このケースの中で起こっていることを実感します」と部長の西野研さん。

そんな「カッター・ナーセリー・ケース」の可能性は、まだまだある。たとえば、日本原産であるノシバの苗栽培。通常は種まきから2年かかるところ、ケースで育てるとわずか2カ月で苗まで育つ。このノシバが注目されているのは、二酸化炭素を濃縮してエネルギーに変えることができる「進化した植物」、つまり「C4植物」だから。C4植物はサトウキビなど熱帯植物が多いが、ノシバは北海道の極寒の地まで自生しているの

に利用された「植物輸送器」です。炎天下、水を与えずに植物を密封するなんて、すぐに弱って枯れてしまうのでは……と、最初は半信半疑でした。しかし、結果は意外なことに。換気穴を開けた箱の中の植物がほとんど枯死したのに対して、密封した箱の中では1カ月以上、すべての植物が環境に適応し、生き生きとしていました」

そう語るのは、顧問の片山一平先生。ケースの構造は、魔法瓶を外側に向けたものと同じだ。外部からの熱を遮断するため、側面は発泡スチロール製の断熱材で覆い、光をわずかに取り入れるため、天板には90%遮光の遮熱フィルムを張っている。このケースに長期間、植物を入れて密封すると、内部は植物から蒸散する水分によって高湿度となる。すると、箱いっぱいには充滿した水蒸気は、天板から入ってくる熱を吸収して温度の上昇を抑制し、植物や土からの水の蒸発を抑えるというしくみ。あらかじめイネの種を水に浸けなくても、このケースに入れば発芽し、早く成長をとげるのも高湿度のおかげだ。

「小さな地球があるみたい。このケースを観察していると、本当にそう感じます。地上の植物から蒸散する水分が熱を吸収し、暑さをやわらげてくれるのと同じことが、このケースの中で起こっていることを実感します」と部長の西野研さん。

高校の屋上に案内してもらった。すると、そこではすでにノシバによる屋上緑化実験が始まっていた。真夏の日中、屋上のアスファルト表面に設置された温度計が示した温度は、なんと66℃。日中の砂漠にも負けな

若者たち。



エコは楽しく。
早稲田大学「環境ロドリゲス」

海の家が立ち並び、水着姿の人々がにぎやかに遊ぶ真夏の湘南海岸。そんな光景の中、オレンジ色や青色のTシャツ姿でゴミを拾う、20人ほどの若者たちがいた。彼らの正体は、早稲田大学の学生を中心とする環境サークル「環境ロドリゲス」のメンバー。湘南海岸でのゴミ拾いは、彼らのプロジェクトのひとつである「湘南レレレ隊」の活動だ。

「私にとっては、これが最後のレレレ隊。だれよりも多く拾いますよ！」照りつける強い日差しの下、そう爽やかな意気込みを見せるのは、幹事長の外山志穂さん（教育学部3年）。「ゴミ拾い」と聞くと、なんとなく地味でつまらないイメージだが、メンバーはみな、いまどきの若者たち。トング片手にゴミを拾う姿に、つまらない雰囲気は微塵もない。というのも、午前中にごみ拾いを終えたら、午後は自由時間。さらに夜には花火大会が待っている……と、楽しみ満載の企画なのだ。

「環境問題ばかりを取り上げても、一般の人にとっては敷居が高く、なかなか活動が広がりません。多くの人に活動をずっと続けてもらうためには、やはり『楽しさ』がなければ。いろいろな楽しみとともに、『環境』に取り組めることが、私たちの強みです」

と外山さんが語るように、「環境ロドリゲス」では、さまざまなメンバーによって10件以上のプロジェクトが動いている。たとえば新入生に人気が高いプロジェクトのひとつが、音楽と環境をテーマとする「エコ・ライブ・ミュージック」。その活動内容は、生協でレジ袋を断るなどの環境活動に参加することでポイントが貯まるシステムを作り、さらにポイントをたくさん貯めた学生をミュージックイベントに無料招待するというものだ。このプロジェクトを担当する田中祐一さん（政治経済学部3年）はこう語る。

「いかに魅力あるイベントを実行し、多くの学生を巻き込めるかがテーマ。ほかの音楽サークルの協力を得て、アーティストを呼ぶための渉外に当たったり、ポイントのシステム作りでは早稲田大学環境総合研究センターからの技術協力を得ました。自分たちだけではなく、横のつながりも大切です」

そのほか、早稲田大学を中心に都内で普及している紙製のリサイクル弁当容器「ホッかる」は、不燃ごみの大半を占める弁当容器をリサイクル可能な紙製にすることに着目した。「環境ロドリゲス」生まれの商品。彼らの活動は縦横無尽、人々を自然に巻き込みながら大きなフィールドへと広がり続けている。

環境ロドリゲス
e-mail: m-er@rudo.jp
URL: http://rudo.jp

右頁/湘南海岸のごみ拾いのため集結した、「環境ロドリゲス」のメンバーたち。
上3点/トング片手に清掃作業を行うメンバー。漂着物の中には、ポリタンクもある！
左下/「環境ロドリゲス」は、分別しやすいごみ箱「エコ貯金箱」を開発したり（上）、音楽イベントにリユース・カップを導入したり（下）と、さまざまなプロジェクトを進めている（写真提供/環境ロドリゲス）。



3年）はこう語る。

